

# 1910年開催の日英博覧会における 京都の関与についての考察

野口 祐子

## 序

1910年（明治43年）という年は、日英関係にとって大きな節目となる年であった。1902年に締結され、1905年と1911年に改定された日英同盟は、両国間の絆を強めるだけでなく、日本の帝国化への推進力となった。1905年に日露戦争に勝利した日本は、欧米列強と肩を並べる存在になったことを世界に訴える場として博覧会を必要とした。日本の諸産業の発展状況をイギリスをはじめ世界に示し、貿易を促進する装置として、日英博覧会の企画に積極的に関わった。

日英博覧会は、ロンドン西部郊外のシェパーズ・ブッシュに広大な土地を博覧会用に開発したイムレ・キラルフィ（Imre Kiralfy）が日本政府に持ちかけた話が元となっており、日本で独自に万国博覧会を開催する計画を実現できなかった日本政府が、キラルフィの提案に全面的に賛同して開催する運びとなった。イギリス側はヴィクトリア女王の孫であるアーサー・オブ・コノート王子（Prince Arthur of Connaught、以後アーサー王子と記す）が名誉総裁に就任し、日本側は伏見宮貞愛親王が名誉総裁に就任するという点ではバランスが取れているが、イギリスにとってはキラルフィをコミッショナーとする民間の事業であり、日本側にとっては政府が全面的に関与する国の威信をかけた事業であった（*Japan-British Exhibition, 1910, Shepherd's Bush London, Official Guide, 2nd ed. revised*（以後『日英博覧会公式ガイドブック』と記す）'Introduction' 1-3；松村（2014）212-15）。

この日英博覧会では、京都出品協賛会が*Kyoto*という観光・物産ガイドブックを刊行している。本研究報告は、日英博覧会の特色を把握した上で、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館における調査結果を用いながら、京都による工芸品のプロモーション戦略に注目したい。

## 1 1910年日英博覧会の特色

まず1910年日英博覧会における日本の展示の特色を捉えておこう。図1は『日英博覧会公式ガイドブック』の表紙である。朱塗りの三重塔に満開の藤の花という、いかにも欧米に期待される日本イメージの絵が表紙を飾っている。この表紙からは想像しがたいが、この博覧会には日本の陸海軍、近代的な行政・諸産業・交通網・通信・教育等に関する展示のみならず、台湾と朝鮮に関する展示もあり、日本の近代化、帝国化を誇示する意図がはっきりと表れている。

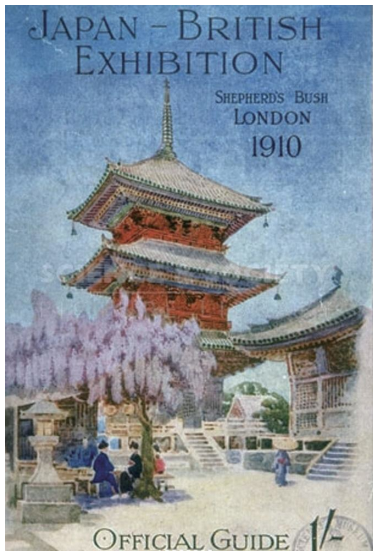


図1『日英博覧会公式ガイドブック』表紙（出典：松村昌家監修、*The Japan-British Exhibition of 1910: A Collection of Official Guidebooks and Miscellaneous Publications*. Vol. 1.）

日英博覧会は1910年5月14日から10月29日までの開催で、概して盛況であった。7月7日には、博覧会関係者一行に遅れてロンドンに到着した日本側の大浦博覧会総裁を迎えるイギリス側によるレセプションが開かれた。その席上で披露されたスピーチで繰り返された内容は次の3点である。すなわち、日本は目を見張るスピードで近代化を推し進め、今やイギリスと肩を並べる帝国となったという双方の認識、その認識に立って両国は友好関係を継続させるという双方の意志、そして近代化によって日本固有の美の創造力を失わないでほしいというイギリス側の願い、である。以下にこのレセプションの主催者であるアーサー王子が披露した歓迎の挨拶の一部を『日英博覧会公式記録』（1911）から原文で引用する。

Japan had now shown them by so magnificent a display of manufactures that she on her part was equally prepared to recognise the value of commercial enterprise.

Whilst cordially welcoming Japan into that happy rivalry they trusted that, whatever her progress might be in the more modern civilisation of the day, her workmen would never lose that delicate handicraft which was so characteristic of her race.

In that there could be no rivalry. The peoples of the West could but admire and be thankful for the material conditions and improved means of communication by which that art of the East, which had so long been to them a mere “traveller's tale,” was brought by those exhibits within the reach of thousands. He, as one of the fortunate who had visited that beautiful country under the most auspicious conditions, had the deepest pleasure in reviving happy memories, not in the gardens of Kyoto, but in the White City. (‘Banquet in Honour of His Excellency Baron Oura: In the Imperial Banqueting Hall of the Exhibition, Thursday, July 7, 1910.’ *Official Report of the Japan-British Exhibition 1910 at the Great White City, Shepherd's Bush, London*. London: Unwin Brothers, 1911. 松村 2011, Vol. 3, 517)

アーサー王子は1906年に、国王エドワード7世の名代で明治天皇にガーター勲章を奉呈するために来日しており、その際に京都も訪れている。このスピーチは、その日本・京都滞在の経験を踏まえてなされている。このスピーチについては、1910年当時ロンドンに長期滞在し、大阪朝日新聞記者として日英博覧会見学記を『欧米遊覧記—第二回世界一周』に寄せた長谷川如是閑

(1875-1969)が、記事の一つでこのレセプションの様子を伝えているので、以下に長谷川如是閑による同箇所の簡潔な翻訳を紹介する。なお、旧字体は現在の字体に改めて引用する。

英国は商工業の威厳を承認する事に於て世界の率先者なるが日本も此の点に於て英国の例に倣わんとす吾人は愉快なる競争者として日本を歓迎すると同時に彼れが如何に近代の生活に於て成功するに到るとも尚且其の職工が日本人の特色たる微妙の手工を失ふに至らざらん事を望むものである、此の点に於て日本は殆ど競争者を有せず、泰西の国民は久しく只旅人の譚（ものがたり）として知られたる日本の美術が今や眼前に披瀝せらるるに至った今日の交通の進歩を感謝する外なし、幸ひにして極めて愉快に貴国を旅行するを得たる余にとりては京都ならぬ此の白京（ホワイトシチー）にて楽しい記憶を新にするを得るは尤も喜びとする所である云々（長谷川 542-43）

日本が「愉快なる競争者」としてイギリスと肩を並べる存在であるという同盟国への賛辞とともに、イギリス側の期待の大きな部分は、アーサー王子が指摘するように、19世紀後半から欧米で流行したジャポニスムによって一般の関心が高まった日本の美術工芸を、ロンドンの地で身近に見られるというメリットにあった。日本が急速な西洋化を成し遂げたことを認めると同時に、それによって固有の特色を失わないでほしいという、明治時代の日本を訪れた欧米人旅行者の多くが旅行記に書き連ねた感想を、アーサー王子もスピーチに盛り込んでいる。

友好的なアーサー王子のスピーチの引用箇所から伝わるのは、当時の多くの欧米人に共通する懸念である。すなわち、彼らが日本に求めるのは、欧米とは異なる美を表現する美術工芸品であり、その生産を支える「微妙の手工」であったものが、西洋化を推し進める日本がその特色を失おうとしているという懸念である。

日本側は、イギリスの期待に添うべく美術工芸の出展に力を入れた。長谷川如是閑によれば、「売行の好きは、安価の日用品は暫く措き、多少高価の品にては象牙細工、刺繍、キモノの類にして高島屋、河島、西村等は可なり繁昌しつつあり」と報告している（546）。いずれも当時の欧米に名を馳せた美術刺繍・染織品の四代飯田新七（高島屋、1859-1944）、美術織物の二代川島甚兵衛（1853-1910）、友禅業の十二代西村總左衛門（1855-1935）という、明治時代京都の美術工芸産業を牽引してきた名前が挙がっている。

では、博覧会来場者の多くは、日本政府が陳列した発展めざましい現代日本に関する展示にどの程度関心を示したのであろうか。長谷川は、来場者の動向を以下のように観察している。

日英博の目星き出品は多く手工品にして、些か規模宏大なる機械工業に関する出品には少数有識者の外は殆ど西洋人の目も注ぐものもなく、殆ど不注意に看過され、従って此博覧会の為多数俗物の日本を小さく美しい国と思ふ見解が愈増長の傾きあるは少々癪に障る次第に候、又我が当局者も大きい堂々たる点に於ては到底西洋人に及ばぬ事主として、小さい美し

い点を發揮せしめんと努めたる故、其の効果も亦自から其の方面に傾くは已むを得ざる次第に候。(長谷川 548)

急速に近代化を成し遂げ、面目躍如たるはずの日本の機械工業に関する出品が注目されないことへの歯がゆさが伝わってくる。ここで長谷川如是閑の観察眼は、欧米人が期待する日本イメージと、そのイメージに沿った日本像を演出する日本側の双方による固定した日本イメージの増幅という現象を見抜いている。長谷川は日英博覧会が現在の日本理解を促すどころか、旧来の日本イメージを増長する方向に働く可能性を指摘する。日英博覧会の日本側の意図とイギリス側の関心のずれがここに露わになっているといえる。

西洋人中の有識者は今は日本に対して斯る旧見解より脱したる如きも、多数は依然として其の旧見解を捨てず、今回の日英博覧会が果して西洋人をして此の旧見地より脱せしめる効果ありやというに、是れ亦頗る覚束なきのみか寧ろこれを増長せしめる恐ありともいふべく候(長谷川 549)

諸産業の今を世に知らしめ、交流・交易を活性化する目的で博覧会や商品陳列館などが企画されるにしても、その全体として打ち出すべきイメージとターゲットが定まらなければ、期待する効果は達成できない。1910年の日英博覧会は、日本が打ち出すべき自己像において、焦点が定まっていないのではないかという長谷川の批判は、今日開かれる日本紹介のイベントにおいても適用できる観点であろう。

## 2 京都出品協賛会が作成した日英博覧会用ガイドブック

長谷川如是閑は開会当初から日英博覧会を見学しているが、「会場内の説明の足りないのは遺憾千万で西洋人には一寸説明を要する品に対しても日本人に見せる通りに品種や出品人の名を書いたばかりなのは不親切である」(533-34)という指摘を繰り返し、苛立ちを隠せないでいる。そんな中、京都府・京都市は独自の取組をして京都の文化・観光と輸出商品、特に美術工芸品の紹介に力を入れた。

日英博覧会では京都府・京都市から、出品者リストも加えると約70ページになる博覧会ガイドブック *Kyoto* が発行されている。またモノクロ両面印刷で三つ折りの簡単なパンフレット '*Kyoto*' も発行された。編集者は長らく京都の美術工芸の近代化と輸出強化、そして博覧会事業に関わってきた丹羽圭介(1856-1941)である。明治6年(1873)の京都博覧会に向け山本覚馬が英文ガイドブック *The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Places for the Foreign Visitors* を著した際に、それを助け出版したのは若き日の丹羽であった。京都を海外に向けて紹介し、京都の美術工芸への理解を広めるというミッションに一生を捧げた人である。

ガイドブック *Kyoto* は、当時の人口・地理・歴史、交通・経済・産業・行政・教育などを簡潔に紹介したのち、主に観光名所と産業の紹介で構成されている (*Kyoto*, 松村 2011, Vol. 2 所収)。ただし産業の内訳は主に繊維・染色・刺繍・陶磁器・漆器・扇子といった、ジャポニスムの流行以来、欧米で人気を博してきた工芸品である。日英博覧会で期待されるイメージに沿ってガイドブックが編まれているといえる。アーサー王子も先に紹介したスピーチで、京都を日本訪問の思い出として挙げているほどに、京都は日本のイメージと結びついていたことを考えると、京都ガイドブックがこの趣旨で編まれるのは首肯できる。

ただし注目すべきは、その序文に提示されたイメージである。以下にその第1パラグラフを引用する。

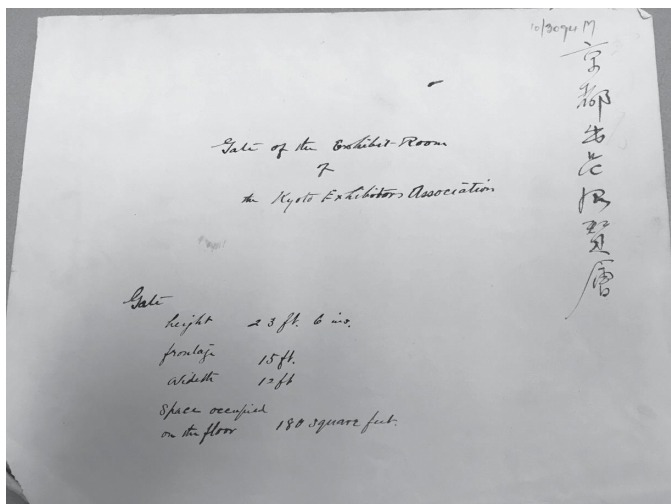
For participation in the Japan-British Exhibition of 1910, Kyoto, City and Fu, has appropriated more than double the money expended by her in connection with the World Expositions held at Chicago, Paris, and St. Louis. This is in the effort to introduce Kyoto to our allied nation. Chokushi-mon, the Gate of the Imperial Messenger, of Nishi Hongwanji, in Kyoto, and the "Crane Room" of the same temple are to be reproduced in the exhibit palace at Shepherd's Bush. These are the products of Hideyoshi's time; and the effort to introduce Kyoto is mainly by depicting the progress attained by her under the rule of that great general and statesman. This was deemed most fitting and appropriate, inasmuch as Hideyoshi was the one who boldly crossed to Corea and made the name of Japan widely known in foreign countries. ('Preface' to *Kyoto*.)

「1910年の日英博覧会に参加するために、京都市・京都府はシカゴ博、パリ博、セント・ルイス博予算の2倍以上を充てて準備を進めた。これは我々が同盟国に京都を紹介せんとするためである。京都西本願寺の勅使門と鶴の間（鴻の間）の複製がシェパーズ・ブッシュに展示される。これらは秀吉の時代に作られた。我々が努力は、主にこの偉大なる軍人で政治家である秀吉の時代に京都が遂げた発展を紹介することにある。大胆に海を越えて朝鮮に至り日本の名を海外に広めた秀吉をテーマとするのはまさに今の時代にふさわしいと考える。」  
(拙訳、( )内は筆者による)

以下に2018年9月の在外研究時に筆者が撮影したヴィクトリア&アルバート博物館（以下V&A博物館と表記）所蔵資料（V&A Archives, Nominal File MA/35/106）中の「勅使門」の写真を掲載する（写真1）<sup>①</sup>。現在キュー王立植物園に移築保存されている「勅使門」すなわち西本願寺唐門の複製は、日英博覧会では日本製品の展示館のそばに設置されて注目を集めた。西本願寺を選んだのは、明治時代の京都で盛り返した秀吉人気も背景にあらうが、秀吉の海外進出と帝国日本とを重ね合わせるためであらうと、説明からは受け取れる。しかし、武力に訴えた朝鮮侵攻のイメージには、京都が売り込もうとしている芸術の本場としての従来の京都イメージとの



(写真1 京都館入り口に設置された「勅使門」前での京都出品協賛会集合写真。V&A Archives, Nominal File MA/35/106. Japan-British Exhibition, 1910. Greg Irvine 氏より提供)



(写真2。写真1の裏面。筆者による撮影)

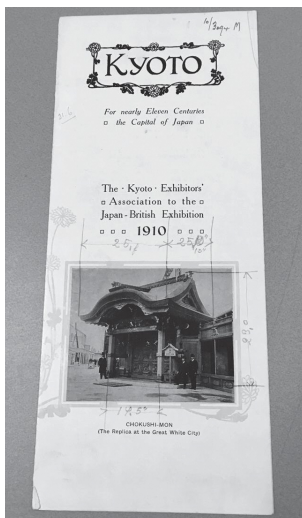
乖離が見られる。

「勅使門」の写真を表紙に用いた三つ折り両面刷りパンフレット 'Kyoto' (写真3、4、5) においても同様の記述が見られる。特にそこでは秀吉を "Napoleon of Japan" と表し、中国までもその野心の視野に入れたことを、帝国日本の拡大のモデルと位置付けている ("He had even thoughts of conquering China and uniting that country with Korea and Japan in one vast empire. [...] His remarkable career has, indeed, furnished a stimulus to healthy ambition and dogged perseverance to all classes of his countrymen. 「秀吉は中国をも征服して朝鮮・日本と共に一つの広大な帝国を作る考えまで抱いていた。(中略) かれの目覚ましい生き方は日本社会のあらゆる階層の人々に健全な野心と頑強な忍耐力を育んだ」(拙訳)。欧米列強が日本の軍事力を警戒するようになった1910年

という時代に、秀吉の野望と現代を結びつけるのはかなり刺激的な言説である。

しかしパンフレット 'Kyoto' では、時代を反映したこの帝国イメージを除けば、京都観光における古社寺、美術工芸見学や、古美術ショッピングなどの楽しみと、快適に過ごせる近代的に整備された都市であることが強調され、現代にまで踏襲されている古都とモダン都市の双方の魅力が紹介されている。

『日英博覧会公式記録』(1911)では、日本織物館(第13号館)には日本の織物だけでなく、美術工芸品が数多く並べられ、最も見所のある展示館と評価しているが、そのそばに設置された「勅使門」の建築美にも注目している。



(写真3. 写真3、4、5は3つ折りのパンフレット 'Kyoto'。鉛筆によるメモ書きあり。筆者によるV&A博物館所蔵パンフレットの撮影)

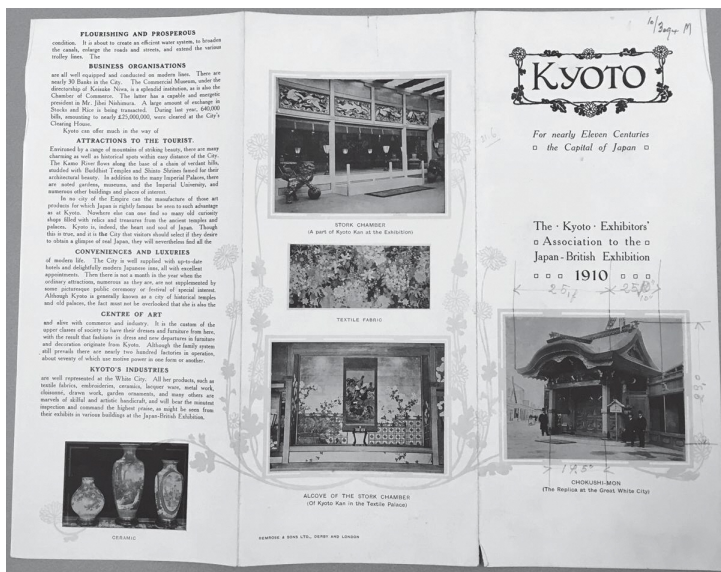
hundred Japanese firms were exhibiting in this one building. They represented the leading houses in their specialised lines throughout the Japanese Empire, and showed the best they had to offer. [...]

A few steps and the visitor's eyes were riveted upon the beautiful structure on their right. It was an exhibit from Kyoto, the capital of old Japan, and the Exhibitors' Association of that city, who were responsible for that unique piece of Japanese art, had done well. It was an exact facsimile of the sacred gateway, called Chokushi Mon, or Royal Gate, of one of the temples there. Through this beautiful doorway only the Emperor and the members of his family are

The Japanese Textile Palace (No. 13), on the other side of the Court of Honour, was full of the most lovely and beautiful examples of Japanese goods. Over eight



(写真4. 筆者によるV&A博物館所蔵パンフレットの撮影)



(写真5. 筆者によるV&A博物館所蔵パンフレットの撮影)

allowed to pass. The original is to be seen in the Temple of Higashi Hongwanji – the largest Buddhist temple in Japan, and one of the most magnificent. It is rightly called the St. Peter's of Japan.

The gate was built in Japan, shipped to London in sections, and re-erected by Japanese workmen at the Great White City. So accurately was it made that each post fitted into its place and required no alteration or adjustment of any kind.

Opposite this lovely creation was the stand of Kawashima Jimbei, of Kyoto, noted for fine tapestries, goffered articles and textile goods generally. [...]

Opposite was another exhibit of beautiful goods by Iida & Co., perhaps better known as Takashimaya, and through the swinging doors were specimens of Yuzen dyeing, for which the firm is famed, as well as for their cut velvet and silk embroideries. (99-100)

「譽れの庭の反対側にある日本の織物館（第13号館）には美しい日本製品が集まり、800以上の日本を代表する専門業者が最上の商品を出展している。（中略）

第13号館の右手には目を釘付けにする建造物が設置されている。それは日本の古都である京都からの京都出品協賛会による素晴らしい作品である。これは京都にある寺院の「勅使門」という皇室用の門の複製である。この美しい門は天皇と皇室の人々しか通れない。本物は日本で一番大きく荘厳な仏教寺院で「日本の聖ピエトロ大聖堂」と呼ばれる東本願寺にある。

この門は日本で建てられ、解体してロンドンに運ばれて日本の職人によってホワイト・シティの博覧会場で組み立てられた。非常に精密に作られているので、組み立てに際してはまったく再調整の必要がなかった。（中略）

この美しい門の向かい側には、繊細な壁掛け織物やひだ飾りその他の織物で有名な京都の川島甚平が出展している。（中略）

その向かいには高島屋として知られる飯田が美しい商品を陳列しており、有名な友禅染や天鷲絨友禅や刺繍が見られる。」（拙訳）

幾つか事実誤認があるがそれは措くとして、この報告書が目しているのは、勅使門においても、京都の美術工芸と同じく、その美しさと技術の高さであり、それが日本を代表する寺院にある天皇ゆかりの門の複製であることが一層価値を上げている。秀吉ゆかりの門であり、秀吉の朝鮮出兵が世界の耳目を集めた、といった *Kyoto* における説明とは関わりなく、注目されるのは美と技術力、そして皇室の由緒であることが確認できる。

さて、このように秀吉の朝鮮出兵から説き起こされた日英博覧会用ガイドブック *Kyoto* であるが、中身は従来の京都イメージに沿った構成になっている。全体は4部からなり、Part I: 'General Information' (pp. 1-11)、Part II: 'Noted Places and Temples of Kyoto and Vicinity' (pp. 12-31)、Part III: 'Industries of Kyoto' (pp. 32-54)、付録として Part IV: 'List of Exhibitors



to the Japan-British Exhibition, 1910' (pp. 1-14) で構成されている。もっとも紙面を割いているのが Part III の 'Industries of Kyoto' である。上述したように、そこで主に取り上げられる産業とは工芸品生産で、従来の京都産業のプロモーションと変わらない。織物、染色、刺繍、編み物・レース、陶磁器、漆器、扇子、玩具、その他の製品、そして園芸である。どのような紹介がなされているか、ここでは長谷川如是閑が会場で大変な人気と報告している刺繍に関する、*Kyoto* 中の紹介文を例にとってみよう。刺繍の技術が中国から日本に入り江戸時代の京都で多種多様な需要に応えた、という説明の後の箇所を引用する。

#### Embroidery.

[...] The demand for these goods greatly decreased after the abolition of the feudal system; and the craft suffered a marked decline.

However, a small display of embroidered goods at the Vienna Exhibition in 1874 and at the Philadelphia Exhibition three years later attracted the attention of foreigners. Japanese Embroidery found access to the foreign markets and met with approval there. This served to revive the industry. To-day the art has reached a high grade of perfection; and Kyoto still remains the centre of the intricate craft characterized as needle-painting which taxes the manual dexterity, the inexhaustible patience, and the decorative instinct of her people.

There were produced during this last year about 250,000 pieces of embroidery valued at about 400,000 yen. More than 80 per cent of this was exported. (40)

〔前略〕封建制度の終焉によって、需要は激減し、刺繍産業は衰えた。

しかし、1874年のウィーン万国博覧会と3年後のフィラデルフィア万国博覧会で刺繍製品をわずかながら展示したところ、外国人の関心を大いに惹くところとなった。その機に日本の刺繍は外国市場で認められたのである。これによって刺繍産業は息を吹き返した。今日、刺繍は高い完成度に達し、京都は今も、日本人の器用な手先と計り知れない忍耐と装飾の感覚に支えられて、この針による絵画というべき精緻な手工品の中心地であり続けている。

昨年1年間で、合計約40万円相当となる25万点の刺繍が制作され、その80パーセント以上が輸出された。〕(拙訳)

どの産業も、日本での長い歴史から説き起こしているのが特徴であり、刺繍においても5世紀から営まれていた歴史ある工芸であることが強調されている。欧米では歴史と伝統に裏打ちされたものへの評価が高いことを意識した解説であろう。徳川時代の終焉により需要が激減したものが、万国博覧会で評価されて現在は輸出が中心という、陶磁器、漆器など他の京都の美術工芸産業と同様の流れをたどっていることが説明される。

京都のみならず国内外の需要に応えた蒔絵漆器についても、その長い歴史における技術の発展、

デザインの変遷が述べられたのち、東京遷都によっていったんは衰微したが、今日は輸出によって京都の漆器産業も持ち直したことが語られる。1909年に京都で制作された漆器は90万点を超え、価格にして59万1935円、その内21万9525円相当が輸出されたという紹介で‘Lacquer’の項は締めくくられる(46)。

これらの説明が日英博覧会の来場者にどれほどの開明をもたらしたかは定かではないが、当時の京都の工芸産業が輸出に大きく依存し、その拡大を目指していたことが確認できる。

実際、日英博覧会における「新美術品」部門の京都からの出品者は東京に次いで多い。表1は日本で作成された『日英博覧会事務局事務報告』上巻の表を元に作成した東京、京都、そして出品者が次に多い大阪からの出品者数と出品点数である。

	日本画	西洋画	彫塑	金工	漆工	玉、石、木、竹、牙、角、介、甲、草工	陶磁、七宝、硝子	染色、刺繍	彫版、印刷	美術工芸品ノ図案及模型	美術建築ノ図案及模型	計
東京	186人	15	38	28	19	6	5	3	12	5	3	320
	347点	25	117	82	32	11	48	9	25	6	3	705
京都	129	6	1	16	11	2	17	5		9		196
	161	11	1	42	40	4	102	47		44		452
大阪	25		3	1	1	3	1	1				35
	33		5	4	3	4	9	1				59

(表1「新美術品」の府別出品者数と出品点数。『日英博覧会事務局事務報告』上巻 p.165 を元に作成)

表1から、一人あるいは一つの工房が複数出品していること、また日本画の出品が圧倒的に多いことがわかる。京都からは特に「陶磁、七宝、硝子」「染色、刺繍」の項目で出品点数が多く、「漆工」「美術工芸ノ図案及模型」も東京に比べて多い。博覧会場で「染色、刺繍」が人気であったのは長谷川如是閑の報告にもあったが、「陶磁、七宝、硝子」「漆工」についてはどうだったのか、次に博覧会終了後の報告から読み取ってみよう。

京都は官民を挙げて日英博覧会に取り組んだが、日英博覧会の総括をした日英博覧会事務局は全体の結果をどのように見たのか、『日英博覧会事務局事務報告』下巻における工芸品への言及箇所を参照する(973)。報告書では全般的に見て、明治時代初期から欧米で大いにもてはやされた装飾的な美術工芸品の輸出額が減ってきていることを憂慮し、日用品の生産・輸出への方向転換を提案している。そのような状況下で、漆器については、輸出漆器の需要がイギリスにおいて「意外ニ多カラス」(972)、「輸出漆器ノ将来ニ関シテハ頗フル考量ヲ要スルモノアルカ如シ」と分析し、今後は盆のような日用品の輸出に活路を見出すべきだと提案している(973)。

陶磁器ノ場合ニ於テハ実用的性質ノ茶器、珈琲器ノ類ト雖モ往々純料ノ装飾品トシテ之ヲ買取ラレ仮令ヒ日用品トシテ需要セラルル場合ト雖矢張一種ノ装飾的実用品トシテ購買セラルルニ反シ盆ノ場合ハ然ラス (973)

装飾的な陶磁器・漆器は今後の需要増が期待できないが、盆は日用品として「中等以下ノ社会」(973)で需要拡大が見込めるといふ分析である。ジャポニスムの流行で大量に出回った派手な装飾品がもはや飽きられた時代への反応と取れる。時代はもはや「装飾品・贅沢品」ではなく実用品の輸出への転換を迫っているという。ただしこの変化は、ジャポニスムの流行の終焉という、装飾品から塗りの盆への転換だけでは対応できない変化を表していたのだと、今日から俯瞰するとわかる。

### 3 京都商品陳列所の開設

日本が日露戦争の勝利に沸く中、京都では京都商品陳列所の設立を企図し、1906年11月起工、1909年5月15日開館式を迎えた。初代所長は日英博覧会にも深く関与した丹羽圭介であった。

『京都商品陳列所の栞』(1912)によれば、「本所の設立は日露戦役の本市記念事業にして地を岡崎公園に下し」、開館式には「大浦農商務大臣、大久保商工局長、能勢総領事、大森本府知事、西郷本市長を始め各国領事、新聞記者其他近府県朝野の貴紳等無慮千二百余名にして頗る盛典なりき。」(「設立概要」1-2)とあり、全国のみならず海外も視野に入れた京都の一大事業だったことがわかる。総工費は181,486円、初めて主要部分に鉄筋コンクリートを使用した、ルネサンス様式の3階建てであった。

この施設は、京都市で製作される主な商品を国内外に紹介し、また国内外の商品や関連書籍を参考品として展示するために作られたもので、当初は販売を主たる目的にしていなかった。出品は6ヶ月ごとに入れ替え、季節にふさわしい商品の展示会なども行われた。

展示された主な商品は工芸品であった。『京都商品陳列所の栞』中の「出品統計表」(30-31)



(写真6. 東山を背景にした京都商品陳列所、右手前は京都府立図書館。個人蔵)

によれば、「織物、染物、刺繍半衿、糸組物、陶磁器、漆器、扇子団扇、金属七宝、小間物及化粧品、人形玩具、貯蔵飲食品、学芸品、雑貨其他、園芸」の14部類に各製造者が出品した。各部類の出品価格総額を円未満切り捨てて示すと、大きい順に金属七宝が8,589円、織物が8,014円、漆器が7,157円、陶磁器が4,316円、刺繍半衿が3,324円、染物が3,290円と

あり、これらが当時の主要な輸出工芸品であることを考えると、輸出を視野に入れて出品を促していることがわかる。

さて、1910年に日英博覧会とヨーロッパ諸国を視察し帰国した丹羽圭介は、京都商品陳列所所長の立場から、京都の海外観光客増と工芸産業発展を期して、*The Directory of Kyoto & Its Traders* (1911) を刊行した<sup>(2)</sup>。丹羽によれば、ヨーロッパ諸国における京都の美術工芸産業の知名度がまだ低いため、組織的な発信をしていかねばならない、それゆえ京都商品陳列所の使命は京都と海外とのビジネスの橋渡しを行うことであった。以下に序文から一部を引用する。

During my tour in Europe last year, I was deeply impressed with the idea that the products of true Japanese art industry of which Kyoto occupies its lion's share, are not yet introduced in a large amount into these countries. It owes chiefly to the lack of proper institutions from where reliable informations could be obtained and in the other part suitable Directory of Japan and its cities were not sent into the world, and the present volumes are published from these motives.

[...] we may briefly state that the Kyoto Commercial Museum made intention to promote and increase business relations between Kyoto and abroad, and to interchange such business courtesies as to improve mutual interests. Prompt and careful attention is paid to all inquiries concerning Kyoto products, and other interesting objects. The Museum is also preparing to furnish the readers of the Directory with detailed informations they want to obtain, concerning the merchants and manufacturers mentioned in the proceeding pages with whom they are going to enter into commercial relations.  
(Preface)

「昨年のヨーロッパ視察で、京都がその多くの部分を担っている真に日本らしい美術工芸産業が、未だ各国に十分に知られていないことを私はつくづく思い知りました。これは主に信頼できる情報を発信するしかるべき組織がないからであって、日本各地の美術工芸産業の案内書が世界に渡っていないためであり、本書はその役割を果たすために編まれました。

(中略) 京都商品陳列所は京都と海外のビジネスを促進し、相互の利益に資する橋渡し役をする目的で設立されました。京都製品に関する問い合わせに迅速で目配りの利いた対応をします。また京都商品陳列所は、本書に掲載した商店や製造者と取引を開始したい業者に詳しい情報を提供いたします。」(拙訳)

この序文から読み取れるのは、京都から工芸品の輸出を促進するには国際的な商取引に対応できないからではない、そのために整備すべきものの一つが、生産者名・小売業者名を含む英語による案内書であって、これによって京都から世界に発信しなければならない、という意気込みである。

この京都商品陳列所 (Kyoto Commercial Museum) による *Directory* は、日英博覧会用に作成したガイドブック *Kyoto* を元に、各工芸分野の説明と生産者・小売業者のリストを加筆し充実させた内容となっている。京都の工芸を博覧会と世界市場へ密につなげようとする、丹羽を中心とした先人たちのたゆまざる努力をここに見ることができる。

#### 4 日本の美術工芸受容の潮目としての日英博覧会

1910年の日英博覧会は、京都が世界に向けて美術工芸の発信をする努力の集大成であった。しかし同時代、V&A博物館は日本製の新しい工芸品を購入しない方針へと転換している。

明治の初めに京都出身の宮川香山は、輸出陶磁器の需要にいち早く対応して、横浜に拠点を移した。初期の作品では花鳥風月を基本としながら花瓶の側面に立体的造形を施すなど新規な意匠によって欧米で名を馳せ、万国博覧会での評価も高かった。その後様々な様式の作品を生み出し、1910年日英博覧会では、釉薬に工夫を凝らした美しい色彩の花瓶を複数出品している。その一つに、氷と雪に閉ざされて冬ごもりする白熊を立体的にあしらった、初期の意匠に通じる花瓶がある (写真7)。

この意表をついた意匠の作品はイギリス人コレクターが購入してV&A博物館に寄贈したものであるが、V&AのWEBアーカイブにおける本作品番号C. 244-1910には以下の解説がある。



(写真7 Vase, C.244-1910 宮川香山作  
© Victoria and Albert Museum, London)

This vase was bought by its donor at the Japan-British exhibition held in London's White City in 1910. It is one of a substantial group of Japanese ceramics from this exhibition reticently accepted as a gift from Kenneth Dingwall at a time when the V&A had made a conscious decision to no longer collect modern Japanese artefacts. (V&A Search the Collections, C. 244-1910 より)

「この花瓶はロンドンのホワイトシティで1910年に開催された日英博覧会で寄贈者によって購入された。これはケネス・ディングウォールが購入したかなりの数に上る日本工芸品の一つであり、V&A博物館は彼からの寄贈を黙って受け入れたが、当時すでにV&A博物館は日本の近代の作品を収集しない方針を決定していた。」(拙訳)

ケネス・ディングウォールは日本の美術工芸品愛好家で、日英博覧会で他にも宮川香山の花瓶や京都粟田焼の七代錦光山宗兵衛の蓋付置物（写真8）をはじめとする陶磁器を購入し、V&A博物館に寄贈している。宮川香山の花瓶も錦光山の置物も、技を尽くした美しい作品である。現在V&A博物館の日本部門 Toshiba Gallery に展示されているこの2作品は、博覧会の時代を象徴



(写真8 Box and Lid, C.242&A-1910 七代錦光山宗兵衛作  
© Victoria and Albert Museum, London)

する作品と位置付けられている。

当時、ディングウォールのような日本の美術工芸品コレクターは多く存在した。しかしV&A博物館では、日本の作品についても歴史的価値のあるものは収集するが、同時代の作品は収集しない方針へと転換していた。同時代の社会の参考に資するとともに後世に残すべき作品を収集するV&A博物館によるこの方針の変更は、イギリスにおける日本製の装飾陶磁器への評価が変化したことを示唆するだけで

なく、日本の美術工芸品がイギリスの美術工芸のインスピレーションの源となる時代がもはや終わったことを告げているように思われる。

このように、日英博覧会における展示とその結果を歴史的に見れば、1910年はイギリスにおける日本の美術工芸受容の潮目だったと言えるのである。

## まとめ

明治初期に東京遷都でいったんは衰退した京都の工芸は、欧米におけるジャポニスムのブームに乗って、輸出に活路を見出した。大量に生産されるにしたがい、欧米人が質の低下を嘆く多くの例を、欧米人の京都訪問記に見出せる（野口 2013）。しかし大量生産品とは別に、生産者は渾身の作品を欧米の万国博覧会に積極的に出品し、高い評価を得て、京都が工芸の中心地であるという認識を定着させる努力を続けた。1910年の日英博覧会には、京都の工芸関係者、博覧会関係者の長年の努力が結集されたことを考察してきた。

国際化が叫ばれる今日、いまだに言語の壁の前で立ちどまっている感のある日本社会であるが、1910年から私たちに残された資料を読むほどに、明治時代に常に海外に目を向け、言語の壁を超えて交流し販路拡大を目指した先人たちの行動力に感服する次第である。

〔付記〕本稿は、科学研究費基盤研究（C）「明治時代京都の工芸とそのイギリスにおける受容と相互影響に関する研究」（平成28-30年度、課題番号16K02274、研究代表者：野口祐子）の研究成果の一部として発表するものである。

本稿を執筆するにあたって、V&A博物館と、本科研助成事業の研究協力者であり同館のSenior CuratorであるGregory Irvine氏の協力を得た。館所蔵資料の閲覧と所蔵作品の実見調査を可能にくださったV&A博物館と、多くのご教示をいただいたGregory Irvine氏、V&Aでの実見調査に協力いただいたPenelope Hines氏に感謝いたします。

また京都府立図書館の福島幸宏氏には、同館が所蔵する貴重書のデジタル化事業でデジタル化された*The Directory of Kyoto & Its Traders*（京都商品陳列所編、1911）他の資料をご紹介いただいたことを感謝いたします。

〔注〕

(1) V&A博物館所蔵資料の閲覧には、研究協力者である東アジア部門日本担当Senior CuratorのGregory Irvine氏の協力を得た。

(2) *The Directory of Kyoto & Its Traders*（京都商品陳列所編、1911）は京都府立図書館における貴重書のデジタル化事業によってデジタル化されたファイルで閲覧した。ここに使用させていただくことを京都府立図書館に感謝します。

〔引用文献〕

*Japan-British Exhibition, 1910, Shepherd's Bush London, Official Guide*, 2nd ed. revised.

London: Japan-British Exhibition British Commission, 1910. 松村（2011）Vol. 1所収。

*Official Report of the Japan-British Exhibition, 1910, at the Great White City, Shepherd's*

*Bush, London*. London: Unwin Brothers, 1911. 松村（2011）Vol. 3。

丹羽圭介（京都出品協賛会代表者）編、*Kyoto*. Issued by Kyoto Exhibitors' Association to the Japan British Exhibition. 芸艸堂、1910。松村（2011）Vol. 2所収。

京都商品陳列所編、*The Directory of Kyoto & Its Traders*. 京都商品陳列所、1911。京都府立図書館所蔵デジタルファイル。

『京都商品陳列所の栞』京都商品陳列所、1912。国立国会図書館デジタルコレクション。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/802940>

農商務省『日英博覧会事務局事務報告』（上巻）1912。国立国会図書館デジタルコレクション。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/801796>

農商務省『日英博覧会事務局事務報告』（下巻）1912。国立国会図書館デジタルコレクション。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/801797>

野口祐子「明治時代の京都を訪れたイギリス人の工芸と室内装飾に対する反応とその思想的背景

- に関する研究」研究ノート、『京都府立大学学術報告 人文』第65号、2013、63-77。
- 長谷川如是閑「附録 日英博覧會」朝日新聞記者編『欧米遊覧記 - 第二回世界一周』朝日新聞、1910、509-553。国立国会図書館デジタルコレクション。http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/760974
- 松村昌家『大英帝国博覧会の歴史—ロンドン・マンチェスター二都物語』ミネルヴァ書房、2014。
- 松村昌家監修、『*The Japan-British Exhibition of 1910: A Collection of Official Guidebooks and Miscellaneous Publications*』6 vols. Eureka Press, 2011.
- 山本覚馬編、『*The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Places for the Foreign Visitors*』Kiyoto: Niwa, 1873.
- V&A Archives, Nominal File MA/35/106. Japan-British Exhibition 1910.
- V&A Search the Collections. Miyagawa Kozan 'Vase.'  
http://collections.vam.ac.uk/item/O39341/vase-miyagawa-kozan/

(2018年10月1日受理)

(のぐち ゆうこ 文学部欧米言語文化学科教授)